

絵本だいすき！

乳児保育の中の 「おさんぽ」と絵本

菊地知子
(保育士)



『とっことっこ』
まついのりこ 作
(童心社 2003年)



『ぶーぶー じどうしゃ』
山本忠敏 作
(福音館書店 1998年)

いずみナーサリー（以下ナーサリー）は、
○歳六か月から二歳児（年度内に三歳になる
子ども）までの小さな子どもたちの通う、大
学附属の小さな保育施設です。

ナーサリーでの生活で、とても大切にして
いる活動の一つに「おさんぽ」があります。
これは、ナーサリーに限ることではなく、幼
い子どもの集う保育園等に共通のことであり、

特徴的なことかもしれません。

保育用語的な意味合いの強い散歩は「おさ
んぽ」と表記されることが多く、ここでもそ
うすることとして、「散歩」のそもその字義
について少し考えてみたいと思います。

散歩の「歩」は、言うまでもなく歩くこと
ですが、「散」のほうはどうかというと、「と
りとめがない」「でたらめである」という意味
に行きつきます。でたらめかどうかはともか
く、子どもたちと出かけるおさんぽは、少な
くとも「出たところ勝負」的な要素が多分にあ
るかもしれませんし、それゆえ、室内での遊
びよりさらに柔軟で即応的な「構え」が、保
育者には要求される活動であると思います。
おさんぽというのは、「散」の字の意をくみ、
気ままに、気まぐれに、そぞろ歩くことを、
「生きる主体である子ども」に許容するもの
であるはず、と言えるのではないかと思います。

菊地知子（きくち ともこ）
お茶の水女子大学附属いずみナーサリー主任保育士。

行って帰ってくる

— 少し新しい自分になる、という感じ

さて、おさんぽでは、行く先や行くルートが決まっていたとしても、道中にも行き先にも、たくさんの、思いがけないこと、未知の世界が広がっていないならなりません。そして、見知った場所へ見知ったルートで行くおさんぽを日々重ねていても、おさんぽからナーサリーに戻ってきた子どもたちは、行く前と同じその子なのだけれど、おさんぽを経たことで、そのたび新しいその子になっています。

それは、保育の中で読む（子どもにとって「読んでもらう」）絵本についても同じことが言えます。同じ絵本を、子どもたちは何べんも何べんも味わいます。内容を知ったからもういい、二度目からは退屈する、というよなものでは決してなく、同じ言い回しを何

べん読んでもらっても楽しいし、同じページを何べん見てもうれしいのです。むしろ楽しさやうれしさ、それに「きつところなるよ」という期待値までもが増していくことが多いように思います。これはとっても不思議なことなのですが、それこそがまさに、子どもたちがそのたびごとに新しい自分になっていく体験であることの証左であるとも言えるのかもしれない。

『ムゥムゥムゥムゥ』

保育室にこの絵本が置かれた当初、一歳半になるMちゃんはまだ自力で歩くことをしていませんでした。絵本の中で、ねこさん、ありさん、ロボットさん、たこさん、いろいろな登場者たちがそれぞれに似合う靴を履いて、それぞれの仕方で「とつとつとつとつ」と歩く様子を読んでもらうとき、保育士の読む声に合わせてMちゃんも声を出します。中でも、

「へびさんくつはいてとーとことーとこ」といいうページでは、へびさんがへびさんらしく(?)「とーとこ」とーとこ」とのんびり歩いて読んでいます。読み重なるからこそ変わる、そのたびごとのMちゃんの心の動きⅡわくわく感に合わせて、保育士の取り方や読む速さや声色も少しずつずれる(変わる)ため、同じ本であることの安定感や安心感と共に新鮮な呼気が絵本に吹き込まれ、新しい人が生まれるし、子どもそのものが新しい人になるのではないかと思えます。繰り返し繰り返し読んでもらい、自らの声が出て、心が動き、Mちゃんは少し新しいMちゃんへと移っています。

程なくしてMちゃんは、自分で歩くようになります。まるでずっとそうしていたかのようなさりげなさで。足を自分で前に踏み出すかどうかだけで、気持ちも身体もとづくに歩

き始めていたのですから、さりげなさは当然かもしれません。

『ぶーぶーじどうしゃ』

子どもたちの移動手段は、歩きばかりではありません。おさんぽも、時にはベビーカーやおさんぽカーに乗って出ることもあります。また、子どもたち自身が、大好きな消防車やパトカーになって出動したり、「スーパーこまち」になってお客さんを乗せて走ったりすることもあります。『ぶーぶーじどうしゃ』はそんな、つい「なってしまう」くらい乗り物に入れ込むような子ども心をくすぐる本です。作者の山本忠敬さんは、乗り物絵本といえはこの人、というくらい、乗り物を題材にした数多くの絵本を手掛けている画家さんです。『しようほうじどうしゃじぶた』(渡辺茂男 作 福音館書店 一九六六年)の絵を描いた人、と聞けば、皆さんおわかりになるのでは

ないでしょうか。その山本さんによるこの絵本は、軽自動車に始まり、乗用車、マイクروبス、郵便車、パトロールカー、救急車、消防自動車、ごみ収集車、宅配車、最後に路線バスが、読み手の子どもたちと等身大の、それらの車のひな型に乗った小さな男の子のまなざしでただただ紹介されていきます。必ずしも今風でない雰囲気の子や子どもが描かれています。乗る物への愛情とその正確さゆえにでしょうか、一、二歳の子どもの中には、飽くことなく繰り返し繰り返し見続けるファンを持つような絵本です。魅了される気持ち、というのとはなんだか不思議で、かつ、とっても魅力的です。

『ぴょん』

子どもたちはおさんぽで、いろいろな生き物に出会います。「歩く」という行為は、主には水平移動ですが、そこで出会う生き物たち、

そして自分たちもまた生き物である子どもたちは、垂直移動、つまり、飛んだり跳ねたりが得意です。驚いたりうれしかったりすると、とりわけ縦方向の動きが多くなります。「わーいわーい！」も「やったやったー！」も、その気持ちが身体で表現されるときには、横揺れではなく立って跳びになります。『ぴょん』は、そんな、飛ばずにはおれない子どもたちの躍動を引き出し、応援してくれる絵本です。これを読んでもらって、跳ねずにいられる子どもは多くないでしょう。空に向かって跳ねずにおれない子どもたちの姿を見ると、私たちの気持ちも、高く明るくなります。躍動する生命は、それそのものが人間にとっての希望なのだと思えます。



▲「ぴょん」
まつおかたつひで 作
(ポプラ社 2000年)